

## 第6章 忍耐

1. 千劫にわたって積んできた布施、如来への供養などすべての善き行ないも、〔菩薩に対して起こした〕一瞬の怒りによって破壊されてしまう。
2. 怒りのような罪はなく、忍耐のような苦行はない。ゆえに様々な手段によって、努めて忍耐を修行するべきである。
3. 心に怒りや痛みがある時は、心は平安を味わうことはない。喜びも幸せも得ることはできず、眠ることすらできず落ち着くことができない。
4. 〔主人が召使に〕財産を与え敬意を持って〔面倒を見て〕も、その恩恵に依存する者（召使）でさえ、怒りを持った主人であれば〔その主人を〕殺そうとさえするだろう。
5. 〔怒り〕によって、親しい友にさえ厭われる。物を施して〔人を〕集めても信用されない。要するに、怒りによって幸せに住することなど決してない。
6. 怒りという敵は〔今世と来世において〕さまざまな苦しみを引き起こす。誰でも懸命に怒りを打ち負かそうとする人は、今世でも来世でも幸せを得る。
7. 〔誰かが私や私の身近な人たちに〕望まぬ仕打ちをしたり、望みを妨害したりすることで生じる不快感は、〔怒りの火を燃え上がらせる糧であり、その糧を見出すと、〕怒りは増長して私を打ち負かす。
8. ゆえに、私の敵〔である怒り〕の糧を完全に破壊するべきである。このように私を苦しめるより他に、この敵にはすることがないのだから。
9. たとえ何が起こっても、心の喜びを乱してはならない。不愉快になったところで望みは叶わず、善も減ってしまう。
10. もし改善することができるなら、嘆く必要は何もない。もし改善することができないのなら、嘆いて何の役に立つと言うのか。
11. 私や私の友人には、苦しみ、侮辱、暴言や誹謗は望まない。しかし、敵に対してはその逆である。

12. 幸せの因はたまにしか生じないが、苦しみの因は非常に多い。しかし、苦しみがなければ出離の心は生じない。それゆえ、心よ、おまえは堅固であるべきである。

13. [自在天・シヴァ神の] 苦行を邪魔する [女神ドゥルガーに] 信心をしたり、カルナパ (カルナータカ州の人) が何の意味もなくからだを焼いたり切ったりする [苦しみの] 感覚に耐えているのなら、私は解脱を得るために、なぜ臆病になり [勇気を奮い起さない] のか。

14. 慣れ親しむことで容易にならないものはない。ゆえに [暑さ寒さや粗い言葉など] 小さな苦しみに慣れることにより、[地獄の火などの] 大きな苦しみにも耐えられるようになる。

15. 蛇や虫 [に噛まれたり]、飢えや渇きなどの感覚や発疹を、なぜとるに足らない苦しみと見ないのか。

16. 暑さ寒さ、風雨、旅路、病気、[鉄鎖、縄索などによる] 束縛、殴打などの困難に耐えるべきである。そうでないと、[自分が受ける] 害は増大してしまう。

17. ある人は自分の血を見るとますます勇気が出る。ある人は他人の血を見ると驚いて気絶する。

18. この [違い] は心が安定しているか、臆病であるかによって生じる。ゆえに危害を物ともせず、苦しみに打ち負かされないようにするべきである。

19. 賢者は苦しみが生じても、その心は非常に [清らかで] 汚されることがない。煩惱 [という敵] と戦う時は、多くの危害が生じるものである。

20. すべての苦しみを物ともせず、怒りなどの [煩惱という] 敵を倒して勝利した者が [本物の] 勇者である。それ以外は [怒りに支配され、普通の敵に勝利したとしても早かれ遅かれ皆死んでいく運命にあり、] 屍を殺しているようなもの [なので驚くべきことは何もない。]

21. しかし、苦しみにはよい点もある。[苦しみを] 厭う心により傲慢さをなくし、輪廻の生きものに慈悲の心を起こして、罪を慎み、善行を好むことである。

22. 胆汁など大きな苦しみを生む源には怒らず、心を持つ者たちになぜ怒るのか。彼

らも皆、〔煩惱という〕条件によって操られているだけである。

23. たとえば、望みもしないのに〔条件がそろると〕この病気になってしまうのと同じように、望みもしない煩惱が否応なく生じてくる。

24. 「怒ろう」と思わなくても、〔条件の力によって〕人は怒ってしまう。「生じよう」と思わなくても、〔条件の力によって〕怒りも生じてしまう。

25. すべての過失や様々な罪も、これらはすべて条件の力によって生じており、それ自体の力で生じているのではない。

26. そろった条件のどれにも、「〔苦しみなどの結果を〕生じさせよう」という意図があったわけではなく、〔それらの条件によって〕生じた〔結果〕にも「私は生じよう」という意図があったわけではない。

27. 〔サーンキヤ学派が〕主張する「根本物質」（プラクリティ）と、〔ニヤーヤ学派が主張する〕「我」といわれるもの、これらも、「私は生じよう」という意図によって生じたわけではない。

28. 〔根本物質（プラクリティ）は〕生じることがないのだから、存在することもない。それならば〔結果が生じた〕その時、〔根本物質から結果が〕生じたという主張は〔理に反している。「我（真我・プルシャ）」は〕永遠に対象物を捉えているのだから、〔その状態が〕途絶えることもないのである。

29. もし「我」が永遠であるならば、虚空のように、〔結果を生むという〕機能を果たさないことは明らかである。他の条件と出会っても、〔「我」は〕変化することがないのだから、どうして機能が果たせると言えるのか。

30. 〔他の条件が（永遠なる）「我」に〕働きかけても、〔「我」の自性は〕以前と同じであり、〔それを超えることはないのだから、〕「我」に対していったい何ができるというのか。「我」の機能はこれであると言えるような、〔「我」との〕関わりを持つものがいったいどこにあると言うのか。

31. このようにすべてのものは他の条件に依存しており、〔条件それ自体も他の条件に〕よって〔生じて〕いるため、それ自体に〔結果を生むかどうかを決める〕力はない。このように理解して、幻のようなすべての事物に対して怒ってはならない。

32. [もしすべての現象が幻のように実体を持たないものならば、] 何が（どんな対策が）何を（怒りを）制止すると言うのか。[実体がないのだから] 制止する必要もない、と言うならば、[世俗のレベルでは、] それ（忍耐）に依存して苦しみの流れを絶ちたいと望むことに不合理はない。

33. ゆえに、敵や友人が道理に反する行ないをしているのを目にしても、[煩悩という] 条件に依存してそのような行ないをしたのだと考えて、穏やかな心でとどまりなさい。

34. もし自分の思い通りに願いを達成できるなら、誰ひとり苦しみを望んでいないのだから、からだを持つ生きものたちには誰にも苦しみが生じることはないだろう。

35. 不注意によって棘などで自分のからだを害したり、女性など欲しいものを得るために熱狂し、食事さえとらない。

36. ある人は首をつり、ある人は崖から飛び降り、毒を飲み、からだに悪いものを食べるなど、功德にならない行ないをして自分のからだを害する。

37. 煩悩に支配されると、大切な自分の命さえ絶ってしまう。そのような時、他人のからだを害さないことなどだろうか。

38. 煩悩が生じると、このように自分さえ殺そうとする者たちに対して、たとえ慈悲の心を起こせなくても、決して怒ってはならない。

39. もし他者を害することが凡夫（子供じみた愚か者）の本来の性質ならば、彼らに怒ることは不合理なことである。それは焼くという本質を持つ火に対して怒るようなものだから。

40. しかし、これらの過失は一時的なものであり、有情の本質がよいものであるならば、怒るのは理に合わず、煙を昇らせた空に怒るようなものである。

41. [実際には棒などに殴られたのだから、] 棒に対して怒るべきである。殴った人に怒るなら、その人は怒りに扇動されて[殴った] のだから、[怒りの対象としては] 二番目であり、怒りに対して腹を立てるのが理にかなっている。

42. 以前私は有情たちをこのように害した。それゆえ、有情は〔今私に〕仕返しをしているのだから、私が今害されているのは理にかなっている。

43. 〔相手の〕武器と私のからだ、この二つが苦しみの因である。相手は武器を掲げ、私はからだを差し出したのだから、どちらに対して怒るべきなのか。

44. 人のからだは腫れ物のようなものである。触ると耐えられない痛みがある。〔そのように見る智慧の眼が〕盲いた私が、欲望によってからだに執着するならば、からだに傷つけられた時、いったい誰に怒ればよいのか。

45. 凡夫(子供じみた愚か者)は苦しみを望んでいないのに、苦しみの因を渴望する。〔以前になした〕自らの過失によって傷ついたので、どうして他者に怒るのか。

46. たとえば地獄の獄卒や、剣の葉を持つ森のように、自らの〔悪〕業によってこの〔痛み〕が生じたのなら、誰に対して怒るべきなのか。

47. 私がなした業によって、私は被害を蒙った。そのために〔私に害を与えた〕有情が地獄に墮ちるなら、この私が彼らを破滅させたのか。

48. 〔私を害した〕彼らのおかげで〔多くの苦しみに〕耐え忍び、私は多くの罪を浄化した。しかし私のせいで彼らは、長い間地獄に墮ちて苦しむことになるだろう。

49. 私は彼らを害し、彼らは私を助けてくれた。〔助けてくれた人に怒るのは〕間違っている。かき乱された心よ、おまえはどうして怒るのか。

50. もし私の心に〔忍耐する〕功德があるならば、地獄に墮ちることはないだろう。しかし、もし私が〔加害者に対して忍耐の修行をし、怒りから心を〕守っても、〔私を害した人〕にこのような功德が生じることなどありえない。

51. しかし〔害された〕仕返しに害を与えるなら、〔彼らを〕守ることはならず、私の〔菩薩〕行も墮落して、〔忍耐の〕苦行も壊されてしまう。

52. 心には姿形がないので、誰にも、どうやっても、壊されることはない。しかし、からだにひどく執着していると、肉体的な痛みによって苛まれる。

53. 侮辱されたり、罵倒されたり、不愉快なことを言われてもからだに害は及ばない

のに、心よ、おまえはどうしてそんなに怒るのか。

54. 他者が私を嫌っても、今世や他世で私を食い尽くしたりして〔直接危害を与えないのなら、私はどうして〔人に嫌われることを〕厭うのか。

55. 利得の妨げになるから、〔他者のひどい言葉や侮辱〕を望まないと言うならば、私の利得は今世でなくなるが、〔怒りによって積んだ〕罪は〔なくならず、〕ずっととどまる。

56. 私は今日死んだ方がましである。邪悪な手段で生きながらえるのは正しいことではない。私のように長く生きても、死の苦しみは変わらない。

57. 夢で百年の幸せを味わって目覚める人もいる。夢で一瞬の幸せを味わって目覚める人もいる。

58. 目覚めた時はいずれも、その幸せは〔消えて〕戻ってくることはない。長寿であれ、短命であれ、どちらも死ぬ時はこれと同じように消え失せる。

59. 多くの富を得て長く幸せに暮らしても、〔死ぬ時は〕泥棒に剥ぎ取られたように、裸で何も持たずに行かなければならない。

60. 富によって生きるなら、罪を浄めて福德を積めるというならば、富を得るために怒ると、福德は尽きて罪が増えるのではないか。

61. 何のために私は生きているのだろう。〔と考えることが自分を〕墮落させる因になるのなら、罪ばかりなして生きていて何になるというのか。

62. もし「〔私への〕有情の信頼を失わせ、不愉快なことを言う人に対して怒るのだ」と言うならば、他者に対して不愉快なことを言う人にも、あなたはなぜ怒らないのか。

63. 不信は他者〔の心〕に依存しているので、他者の信頼を得られなくてもそれには耐えられる、と言うならば、〔私に対して〕不愉快なことを言う人も、煩惱が生じたことに依存しているのに、それをなぜ忍耐できないのか。

64. 仏像、仏舎利塔、仏法を誹謗したり破壊したりしても、私が怒るのは不合理なことである。仏陀などは害されるということがないのだから。

65. ラマ、親族、友人を害する人々に対しても、前に述べたように、他の条件によって生じていることを理解して、怒りを阻止するべきである。

66. 心を持つ生きものと心を持たないもの、その両方がすべてのからだを持つものに害を与える。それならば、なぜ心を持つものだけに怒るのか。ゆえに、害に耐えるべきである。

67. ある者は無知なために罪を犯す。ある者は無知なために怒る。過失がないのはどちらで、過失があるのはどちらなのか。

68. 他者に害されるような行ないを、どうして以前になしたのか。すべては〔自分の〕行為に依存しているのなら、私はなぜその人に怒るのか。

69. このように理解するならば、すべて〔の有情〕が互いに愛情を持って〔助け合う〕ことにより福德を積めるよう、私も努力するべきである。

70. たとえば、ある家が火事になり、他の家に燃え移ったなら、藁など燃え広がるものを取り除くことは道理にかなっている。

71. これと同様に、心が何かに執着して怒りの火が燃え上がったなら、福德が燃え尽きるのを恐れて、すぐに捨て去るべきである。

72. 殺される運命にある人が手を切られるだけで解放されるなら、なぜ幸運でないなどと言えようか。もし人間の苦しみ〔を味わうこと〕で地獄〔の苦しみ〕から逃れられるなら、なぜ幸運でないなどと言えようか。

73. わずかな今の苦しみにも耐えられないのなら、地獄の苦しみの原因となる怒りをどうして阻止しないのか。

74. 欲望のために〔身を〕焼かれるなど、何千もの地獄の苦しみを体験したけれど、私は自らのためにも、他者のためにも、利益をもたらすことはできなかった。

75. 〔今の〕この〔苦しみ〕は少しも害をもたらすことなく、大きな目的を達成することができるのだから、有情の危害を取り除くための苦しみに、ただ喜びを持って立ち向かうのが理にかなっている。

76. 他の人が〔私の敵の〕功德を称えて喜び、幸せになるのなら、心よ、おまえもそれを称えてなぜ彼らのように喜ばないのか。

77. あなたの喜びと幸せは、幸せを生む源であり、罪ではない。功德ある者たちが示された、人を集める最高の手段である。

78. 〔もし、あなたの敵の功德を他者が称えて幸せを感じる時、〕「〔称えた〕他の人たちがこのように幸せになる」と言って、もしあなたが、〔彼らの〕幸せを望まないならば、〔召使に〕賃金を払うこと〔など人が喜ぶ行ないを〕しないので、今世や来世で〔幸せを得ず〕墮落することになるだろう。

79. 〔人が〕自分の功德を称える時は、〔褒めてくれた〕人も幸せになることを望む。しかし他者の功德が称えられる時は、自分の幸せさえ望まない。

80. 一切有情の幸せを願って菩提心を起こしたのに、有情が自ら幸せを見出すと、どうしてそれを怒るのか。

81. すべての有情が、三界において供養される仏陀となることを願っているのに、彼らが無常な尊敬や布施を受けているのを見るだけで、なぜそれに悩まされるのか。

82. あなたは養うべき人を養い、物を与えるべきなのに、親族が〔自分の力で〕生活の糧を得ると、それを喜ばず、また怒る。

83. もし〔衣食などわずかなものさえ〕有情〔が得ること〕を望まないのなら、彼らが悟りを得ることを願うことなどどうしてありえよう。他者が豊かになるのを厭う人に、菩提心などどうして持てようか。

84. 〔敵が施主から衣食などを〕もらおうが、それが施主の家にあろうが、どちらにしてもあなたの手に入らないのなら、〔敵の手に〕入ろうと入らなかろうとどちらでもよく、それをどうしようというのか。

85. 福德や信心、自らの功德を〔怒りによって〕どうして捨てるのか。利得〔や幸せの因〕を維持せず、〔破壊している〕自分に、どういう理由で怒らないのかを言うがよい。



86. あなたは自ら罪ある行ないをしたことを悲しまないばかりか、福德ある行ないをしている人と張り合おうというのか。

87. 敵がいやな思いをしたからといって、あなたがそれを喜ぶのはなぜなのか。〔敵がひどい目にあえばよいと〕あなたが心で願っただけでは、敵を害する因にはならない。

88. あなたが望んだように〔敵が〕苦しみを得たとしても、あなたがそれを喜んで何になるのか。もし、「満足が得られるからだ」と言うならば、これより破壊的なことが他にあるのか。

89. 煩悩という獵師の投げた釣り針は、耐え難いほど鋭い。それに捕らえられたなら、私が地獄の獄卒たちによって大釜の中で煮られるのは確かである。

90. 称賛、名声、尊敬などは福德や長寿〔を得る助け〕にはならない。私の力にもならず、無病にもならず、からだが快適になるわけでもない。

91. 何が自分の利益になるかを知るならば、〔称賛や名声など〕何の役に立つというのか。心の快樂のみを望むなら、賭け事や酒などに依存すればよい。

92. 名声を得るためには財産も捨てるし、〔戦争に行つて〕命さえ捨てる。〔それほどまでして望んだ〕ただの〔褒め〕言葉にいったい何ができるのか。〔私が〕死んだら、〔これらの名誉は〕いったい誰を幸せにするのか。

93. 砂の家が崩れると、子供たちが泣き叫ぶように、称賛と名声がなくなると、我が心は子供のように〔悲嘆にくれる。〕

94. その場限りの音（称賛の言葉）には心がないので、私を称賛しようという思いなどあるわけがない。「〔私を褒めることで〕他者が喜びを得る」と言うかもしれないが、それがなぜ〔私の〕喜びの因になると言うのか。

95. 〔称賛が〕他者に対してであれ、私に対してであれ、〔称賛する〕人の喜びが私に何の利益をもたらすと言うのか。その喜びと幸せはその人だけのものであり、私とその分け前を得ることはない。

96. 〔称賛する〕人が幸せになることで、私も幸せになるならば、誰に対してでも同じように接するべきである。このように他者が〔私の敵を褒めて〕喜びを生じ、幸せに

なることを、私はなぜ不幸に感じるのか。

97. ゆえに、「私は称賛された」と言って、自分に喜びが生じるというのも理にかなっていない。それは凡夫（子供じみた愚か者）のようなふるまいでしかない。

98. 称賛などにより、私の心はかき乱され、それによって〔輪廻を〕厭う心も壊される。功德ある人たちに嫉妬し、すべてのすばらしきものをも破壊する。

99. ゆえに、そばにいて私への称賛などを破壊する人たちは、私が悪趣に堕ちるのを守るためにいてくれるのではないだろうか。

100. 私は解脱を求めているので、富や尊敬などの束縛はいらない。〔私が称賛されることを阻止し、〕私を束縛から解放してくれる人たちに、私はどうして怒るのか。

101. 苦しみに入ろうとする私を、仏陀のお加持のように、〔苦しみのある場所に〕堕ちないよう〔悪趣への道を塞ぐ〕扉板になってくれる人（敵）に、私はどうして怒るのか。

102. これを「私が福德を積む邪魔をする」と言ってその人に怒るのも理に合わぬことである。忍耐に匹敵する苦行はないのだから、私は〔忍耐の修行〕にとどまるべきではないのか。

103. もし私自身の欠点によって、〔敵の害〕に耐えられないならば、福德を積む因となる〔忍耐の修行〕が身近にあっても、自分でそれを妨げていることになる。

104. 〔因となる敵が〕存在しなければ、〔忍耐による福德は〕生じない。〔因となる敵〕が存在すれば、〔忍耐による福德が〕生じる。それ（敵）こそ〔福德〕の因ならば、どうして〔敵が〕それ（忍耐）を妨げるというのか。

105. ちょうどよい時に現れる乞食は布施の妨げにはならない。出家しようとする人にとって、出家させる戒師が出家の妨げになることはありえない。

106. 世間に〔布施の対象となる〕乞食はたくさんいるが、〔忍耐の修行の対象となる〕害をなす人は稀である。このように、相手に害を与えなければ、害を与えてくる人はいない。

107. ゆえに、苦勞なく家に宝物が生じたように、菩薩行の助けとなる私の敵〔の出現〕を〔心から〕喜ぶべきである。

108. この人（敵）と私〔の双方〕により、〔忍耐の修行が〕達成できるのだから、忍耐の〔修行の〕結果を最初にこの人（敵）に与えるべきである。このように、この人（敵）は忍耐の修行の因なのだから。

109. もし、「〔敵には私に〕忍耐の修行を成就させようという意図がないのだから、この敵は供養の対象ではない」と言うならば、成就の因である正法にも〔修行を成就させようという意図はないのに〕なぜ供養するのか。

110. もし、「〔敵には〕害を与えようという意図があるのだから供養の対象ではない」と言うならば、医者のように〔人を〕助けようと努力する人に、どうして私が忍耐の修行をすることなどできようか。

111. ゆえに、強い憎悪の心〔で害を与えてくる敵〕には忍耐の心を起こすことができるのだから、敵こそ忍耐を生む因であり、正法と同じように供養する価値がある。

112. ゆえに、「有情は福田であり、勝利者（仏陀）の福田である」と牟尼は説かれた。彼ら（有情と仏陀）を喜ばせた多くの者が、このように完全なる彼岸に至ったのである。

113. 有情たちと勝利者〔仏陀〕たちによって仏法を成就することができるのだから、〔両者はどちらも〕同等であり、勝利者〔仏陀〕を尊敬するのと同様に有情を尊敬しないのはどうしてなのか。

114. 〔有情と仏陀が持つ〕意志の功德は等しくはないが、結果の点からは同等であるため、有情たちにも功德がある。ゆえにこの両者は同等である。

115. 慈愛の心を持つ人を供養すること〔で積む功德〕は、有情の持つ偉大な性質である。仏陀に信心する〔ことで得られる〕功德もまた、仏陀の持つ偉大な性質である。

116. 〔有情と仏陀はどちらも〕仏法を成就するための〔基盤の〕一部であるため、両者は同等だと言われている。しかし、海のように限りない功德を持つ仏陀たちに匹敵する有情はいない。

117. [仏陀が持つ] 最高の功德である二資糧（福德と智慧）の、ほんの一部の功德が[有情の] 誰かに見られただけでも、その人を供養するためにこの三界をすべて捧げても十分とは言えない。

118. 最勝なる仏法を生む[因となる] 部分が有情たちにあるのだから、ただそれだけを理由に、有情を供養することは道理にあっている。

119. さらに、[一切有情の] 揺るがぬ友人となり、はかり知れない利益を与えてくださる方々（仏陀たち）に、有情を喜ばせること以外の方法で恩返しをすることができようか。

120. [有情] のためにからだも与え、無間地獄にさえ行かれる方々（仏陀たち）に、[有情を] 利益することが恩返しになるのなら、[有情] がひどく私を苦しめたとしても、[怒らず有情のために、身口意の] すべてのよき行ないをするべきである。

121. ある時、私の主人である[仏陀と菩薩たち] は、[有情] のために自身のからださえ顧みず[有情救済のために働かれた。] それに対して無知な私は、プライドが高く、どうして召使となって[有情に] 奉仕しないのか。

122. [有情が] 幸せならば牟尼たちは喜ばれ、[有情] を害せば[牟尼] たちは悲しまれる。[有情] を喜ばせるならすべての[牟尼] は喜ばれ、[有情] を害すれば牟尼を害することになる。

123. 全身が火で燃えている人には、[食べ物、飲み物、快い音楽など] すべての欲望の対象を与えても心に喜びが生じることはない。これと同様に、有情を苦しめるならば、大悲を持つ方々（仏陀たち）を喜ばせる方法はない。

124. それゆえ、私が有情に与えた苦しみによって、すべての大悲を持つ方々（仏陀たち）を苦しめたその罪を、ひとつずつ今告白し、懺悔いたします。[この懺悔によって] 牟尼を苦しめたその罪を耐え忍んでくださいますように。

125. 如来たちを喜ばせるため、[私は] 今この時よりきつと[悪意を] 抑制し、世間の下僕となって仕えよう。多くの人が私の頭を足で踏みつけても、たとえ殺されても報復せず、[喜んでそれを受けいれて] この世の守護者を喜ばせよう。

126. 大悲の本質を持つ方々（仏陀）は、[以前自他を入れ替える修行をされたこと

により、) この一切有情を自分自身と〔あるいは自分のものと〕みなされることに疑いはない。ゆえに、有情の本質に〔仏性を〕見る者たちは、仏陀自身を見る。それゆえ、守護者の本質を持つ〔有情〕たちをどうして尊敬しないのか。

127. 〔有情による害に耐え、彼らを敬うこと〕これこそ如来を喜ばせる〔最高の行ない〕である。自らの利益を完全に達成する〔手段〕もこれである。この世の苦しみを滅する〔手段〕もこれである。ゆえに、私は常にこれ（忍耐の実践）を実践しよう。

128. たとえば、幾人かの王の家臣が多くの人を害しても、長い目で見ると、〔たとえ報復する力があっても家臣たちを〕害することはない。

129. それは〔家臣たち〕だけの力ではなく、〔その背後に〕王の〔軍〕力があるからである。このように、ささいな危害を与える〔無知で〕力の弱い者たちを軽んじてはならない。

130. このように、〔もし有情に報復すると、その背後には〕地獄の獄卒や大悲を持つ方々（仏陀たち）の力があるのだから、民衆が横暴な王に〔注意して〕仕えるように、〔害を受けても報復せず〕有情たちを喜ばせるべきである。

131. もし王が〔どんなに〕怒ったとしても、有情を喜ばせなかったことで〔私が〕経験する地獄の苦しみを、〔王が〕与えることなどできはしない。

132. もし王を喜ばせたとしても、有情を喜ばせたことで得られる仏陀の境地を〔王が〕与えてくれることなどありえない。

133. 有情を喜ばせたことで、将来仏陀となれるのはもちろんのこと、今世における繁栄、名声、幸せが得られるのに、なぜそれを見ないのか。

134. 輪廻においても忍耐〔の修行〕により、美貌、無病、名声などが得られる。これらにより非常に長い寿命を得て、転輪王の広大なる幸せを得る。